

## 台湾原住民族部落<sup>1</sup>スマグスにおける観光事業と多文化教育 — タイヤル住民の「部落を教室にする」実践 —

ヤユツ ナパイ

はじめに —「部落を教室にする」—

第1節 スマグスにおける観光事業

第2節 「スマグス・タイヤル部落学校」<sup>2</sup>への試み—スマグス実験分班

結論 —原住民族にとっての多文化教育のモデル—

(要約)

今日の原住民族部落において主要産業のひとつは観光事業である。ただ、多くの場合、観光事業は原住民族に対して実質的な経済的利益をほとんどもたらさないばかりか、伝統文化や自然環境へ悪影響を及ぼした。だが、近年、自主性・自発性・集団性を備えた地域主体意識を高めつつ、今までとは異なる観光事業の可能性を探求している例もある。新竹県尖石郷におけるスマグス部落はそのひとつである。そこでは原住民族主体の観光事業が行われている。それは部落という空間を利用して、伝統文化を傳承しながら多文化教育を行い、「部落を教室にする」という構想を現実化しようとする実践である。本稿では、「タイヤル部落学校」の建設を目標とする中で「スマグス実験分班」のカリキュラムや教師採用、教材編集などがどのように行われているかの検討を通して、スマグスの住民が伝統的な知恵・空間と現代的な知恵・空間との結合を図ろうとしていることを明らかにする。スマグスにおける多文化教育の実践は、台湾原住民族における教育のあり方を考え直すうえで、ひとつの重要なモデルとしての意味を持ちうると考えられる。

はじめに —「部落を教室にする」—

台湾原住民族は、日本による植民地支配と中華民国の国民党政権による統治を経て、百年あまりの間に、政治や経済、宗教、文化などのあらゆる面で統治民族への同化が進み、部落における伝統文化の傳承が断絶するという危機に直面している。最も根本的な問題は、商品経済の浸透により従来の部落のあり方では生計を立てられなくなり、多くの原住民族が仕事を求めて自らの居住する部落を捨てざるをえないことであり、そのことを子どもや青年も認識しているために自らの言語や文化を学ぼうとする意欲を失ってしまうことである。原住民族の言語・文化の教育が効果を上げるためには、生業の安定化を含めて部落での生活全体の立て直しが必要である。そうした生業のひとつとして着目されるのが観光事業である。

1980年代以降、台湾では観光事業が発展し、国内外の旅行者の関心は原住民族地区における自然豊かな山林へと向けられた。また台湾原住民族14族はそれぞれ独特な文化を持っているため、その歴史、伝説、習慣、衣装、飲食などの多様性も観光資源となった。だが、原住民族地区の観光事業を研究している謝世忠が指摘するように、多くの場合、観光事業は原住民族に対して実質的な経済的利益をほとんどもたらさなかった。そればかりか、「鮮やかな衣装と陽気な性格」というステレオタイプな原住民族イメージを再生産している場合が少なくない。さらに、観光客の望む形での歌や踊りの改変はその担い手にアイデンティティの混乱を生み出してしまう場合もある<sup>3</sup>。

しかし、近年になって、原住民族から自主性・集団性を備えた地域の主体意識を高めるような、今までとは異なる形での観光事業の可能性を探求しようという声も上がってきた。その中で

もパイワン族の芸術家サクリユー・パワワロン (Sakuliu Pavavalung) が1998年に著した『部落を教室にする』<sup>4</sup>は、観光事業と教育事業の連関の必要性を説いたものとして著名であり、原住民族の知識層に大きな影響を与えてきた。サクリユーは本書で以下のように述べている。「われわれは若者が再び家に戻る道を見つけなくてはならない。新しい世代の子どもに改めて祖先たちが伝承してきた文化・知恵を体験・習得させ、母体となる文化の懐抱に戻らせなくてはならない」(p.16)。彼は、より多くの若者が家(部落)に戻らなければ、部落の未来について発展的な理想像を創造することはできず、「人は部落の命だ!」と主張する。

伝統的な原住民族社会の部落では人と土地が結びつき、豊かな民族文化・知恵が生み出されてきた。部落という空間は、その民族が有する独特な文化を身につけさせる「教室」だった。サクリユーは原住民族がこのような伝統的な概念を取り戻し、現代的な社会で適応することができるようにするためのキーポイントは「教育」だと指摘する。具体的には「伝統教育は生活から体験する教育だ。ひとりを教育することは、家庭から部落、また社会から自然環境に至る生命の成長の流れで人と人、そして人と自然環境が協和することだ。すなわち、自然環境は学校で、年輩者は先生だ」(p.28) というものである。

だが、実際には現在の部落ではキリスト教が伝来してから、従来の原住民族の宗教観<sup>5</sup>がキリスト教のものへと置き換えられ、その一方で、国民形成を目指す学校教育が主流の教育システムとなった。サクリユーはこの2つの形式の「同化教育」について、「母体となる文化の教育が非常に欠乏している」と指摘した。そこで、サクリユーは「部落を教室にする」という概念を提起した。それは、部落において言語や工芸、技能、思想などの文化を伝承し、現代社会と共存できる文化を創造することを意味する。さらに、部落の自然環境や農産品などの資源に伝統文化的な要素を加えて新しい事業を生み出し、部落での就業機会を増やし、住民が住みたくなくなるような部落環境へ変え、持続可能な開発に基づく部落を創り上げることが目指されている。

サクリユーは伝統文化の重要性を強調するが、それは単に「昔に返って」原住民族文化を復興することを呼びかけるものではない。サクリユーは原住民族文化をマンゴーに喩えている。すなわち、18世紀のマンゴーと20世紀のマンゴーは、外観がだいたい同じである。それはタネが変わっていないからである。しかし、食べ方をみると、18世紀にはそのまま食べたのに対して、19世紀になると、ジュースにして飲むこともあった。さらに20世紀にいたっては、ドライマンゴーにして食べることもできるようになった。道具と知識の向上により物事の発展には無限の可能性があり、マンゴーは部落の伝統的な知恵を現代社会における色々な場面に応用しえるという比喩である。つまり、伝統的な知恵・空間と現代的な知恵・空間とを結びつける重要性が示されている。本稿では、サクリユーの「部落を教室にする」という言葉を手がかりとしながら、原住民族部落における観光事業と教育事業との連関について考察することにした。

具体的に対象とするのは、新竹県尖石郷におけるスマグス (Smangus、司馬庫斯) 部落での試みである。スマグスを取り上げるのは、第一に観光事業や教育事業が原住民族主体で行われているからである。第二にサクリユーも着目している事例であり、サクリユーの主張の現実的可能性を考えるためにも好適な事例だからである。2000年にスマグス部落の住民は、観光事業を向上さ

せるために阿里山の山美部落や茶山部落、台東の布農部落文化園區などを訪問し、その際に屏東の三地門郷に工房を持っていたサクリユーにも会っている。2005年、「台湾原住民族部落培力協会（台湾原住民族部落育成協会）」（以下、原培会）が新竹県尖石郷の産業発展にかかわる講座の開設を計画した時には、サクリユーを講師として招いている。それ以来、スマグス部落は「部落を教室にする」という概念についてサクリユーと様々な意見交換を続けている。筆者自身も、2007年1月29日から3日間、スマグス部落の頭目一同とともに台東に住むサクリユーを訪問し、部落にある小学校を如何に発展させるかについて討論したことがある。

スマグスに関する研究として、蔡秀菊が観光事業をめぐる共同経営が形成された経緯について論じているほか<sup>6</sup>、スマグスの頭目（タイヤル語では「マリフ（Mrhuw）」）。タイヤル社会ではひとつの部落にはひとりの頭目があり、原則的に世襲ではなく、有力者が選ばれる）の息子であるラフイ・イチェ（Lahuy Icheh）が修士論文でタイヤル文化の主体性を強調し、地域の知恵を実践することの重要性について論じている<sup>7</sup>。筆者自身も原住民族の観光事業全体の中でスマグスにおける観光事業の特徴を指摘し、阿里山の山美部落との比較を不十分ながら試みている<sup>8</sup>。しかし、スマグスの独自の教育のあり方の模索に関するこれまでの研究は概要を指摘するに止まり、時間割の編制や独自の語学教材の編集のような具体的なレベルには及んでいない。

他方、原住民族の部落における「族語」（原住民族にとっての母語を指す）教育や伝統文化教育一般については、統計的な報告はあるものの、特定の部落のフィールドワークに基づく研究は、管見の限りではなされていない。他の地域との比較連関の中でスマグスの実践の意味や位置づけを明確化するためにも、スマグスの観光事業と教育事業の特徴についてできるかぎり具体的に叙述する作業が、まず必要である。

そこで本稿では、2006年5月から2008年8月までのフィールドワークで収集したデータに基づきながらスマグスの試みの特徴を考察する。最初にスマグスにおける観光事業の共同経営組織の特徴について、次に教育について論じることとする。

## 第1節 スマグスにおける観光事業

### 1. 共同経営組織の成立

スマグスは、新竹市から南東方面に約150キロの道のりの山間部に位置しており、行政的には新竹県尖石郷に属する。国道3号（第2高速道路）を降りる竹東鎮から部落まで車で約3時間かかる。住民であるタイヤル（Tayal）族の人々はもともと現在の南投県仁愛郷に居住していたが、数百年前に獵場や耕地が不足したために北方に大規模に移住したと言われる。そのうち、タイヤル族におけるマリコワン（Mrgwang）部族に属する一支族<sup>9</sup>が、今日のスマグス部落に定住した<sup>10</sup>。2007年12月現在、部落は5つの親族団体で構成されており、戸数は33戸、人口は163人である。その内訳は、戸籍を部落に置き、居住する住民が90名、戸籍を部落に置いていないが、居住する住民が14名、そして戸籍を部落に置いているが、居住していない人が59名となっている。したがって、実際に部落に居住している住民は104名である<sup>11</sup>。部落全体がひとつの小規模な集落

であり、下位の地域単位はない。

日本植民地時代以前、部落の生計は狩猟、そして粟、トウモロコシ、芋、カボチャなどの栽培による自給自足で成り立っていた。1945年、中華民国による統治がはじまって以降、土地を部落が共有するという伝統的な利用方法は破壊されて私有化が進み、1950年代から住民は商品作物を栽培し始めた。最初は価値の高い桐や杉などを植え、1960年代からはりんごや梨も栽培した。しかし、部落から外に通じる自動車道路が開通していなかったため、市場への流通が難しく、徐々にこうした農業は廃れていった。1970年代からシイタケの栽培が始まり、シイタケを乾燥して販売することを主な収入源としていた。1991年にスマグス頭目一同は桃園県のタイヤル部落を訪問し、そこで巨木の観賞を目玉とした観光事業や桃の栽培が発達し、住民の生活が大幅に改善されていることを目の当たりにした。この影響で桃の栽培や管理技術が学ばれ、1996年には長い間休耕していた農地で桃が植え始められた。現在でも、桃は大きな農業収入源となっている<sup>12</sup>。

スマグスは深い山奥にあり、台湾原住民族部落のなかで最も開発が遅れたところだと言える。1979年に初めて電気が通るようになるまで、「黒色部落」とも呼ばれていた。スマグスの北西、山の反対側に位置する新光部落は比較的早くから開け、バスも通じ、新光国民小学も存在したが、新光部落まで行くのにも住民は数時間をかけて徒歩で溪谷を越えねばならず、生活用品などを補充するためには新光部落からバスなどの交通機関を利用していた。

図1：スマグス位置図（筆者作成）



観光事業の発展は、桃の栽培と同様、1991年のタイヤル部落訪問が契機となった。その時、スマグスの頭目は巨木があるという先祖の伝説を思い出し、部落民を動員して巨木を探し始めた。彼らは、2、3ヶ月をかけて、伝説通り檜の巨木群が存在することを発見した。林務局の統計資料によると、その中には台湾で2番目と3番目に大きな巨木もあった。巨木の幹の周囲の大きさは、それぞれ20.5mと19.7mである<sup>13</sup>。巨木の発見に伴って、観光客も訪れるようになった。そのことがきっかけとなり、1995年によく部落への自動車道路が開通することになった。

初期の観光事業では民宿や飲食店などは個人経営であり、観光客を奪い合うことで住民の間に対立がおこったこともある<sup>14</sup>。例えば蔡秀菊の取材記録によると、あるインフォーマント<sup>15</sup>は、「民宿は家族ごとに経営しているので、みんなの考え方が違う。兄弟でも喧嘩をする。例えば私の叔父さんやいとこのお兄さん、お隣さんなどはお互いに売り上げを競うこともある…観光客獲得のため、宿泊代を下げたりもする。300元を250元か200元に下げて、商売にならなくなったこともある」と述べている。このような競争は、住民の人間関係に大きなマイナスの影響を与えた。

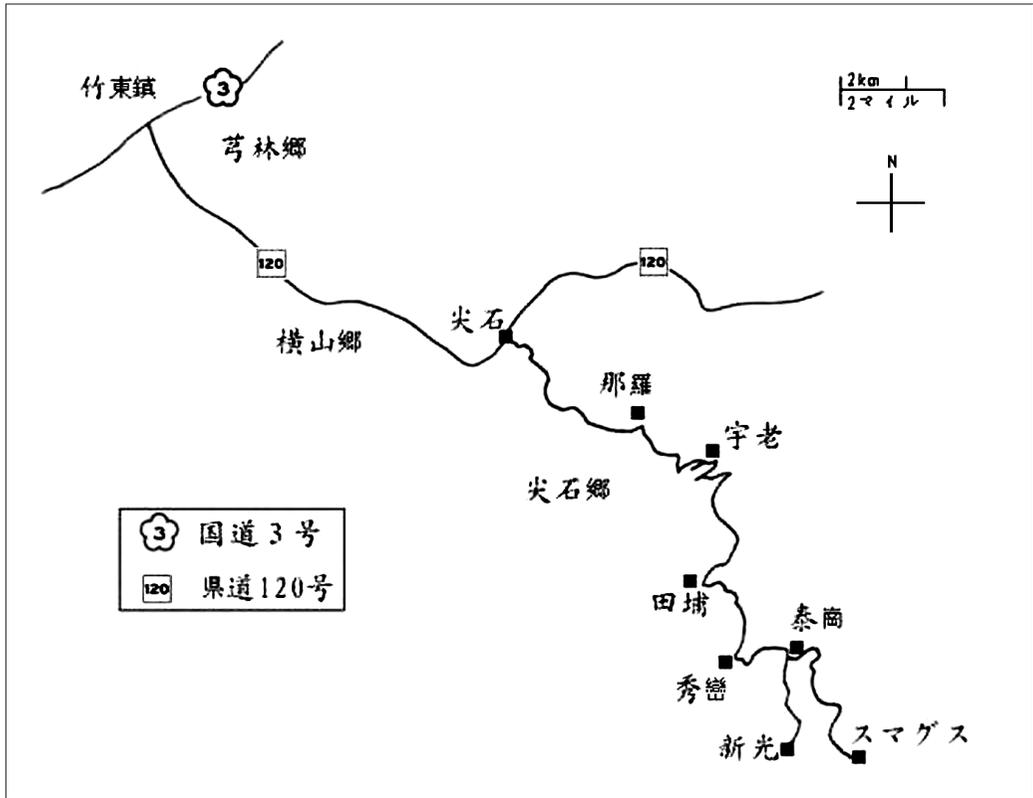
2001年、こうした問題を解決するため、タイヤル族の「ガガ (gaga)」という伝統的社会規範<sup>16</sup>における共有の概念に基づき、共同で観光事業を経営すべきことを説く人々が現れた。彼らは「部落共同経営規則」を作って、入会資格や入会金の割合を規定した。また、観光収益の70%は各戸に分配し、20%は共同基金として公共施設の建設費用や民宿用の消耗品購入費、緊急支援などにあて、10%はローンなどの返済に充てることとした。スマグスの住民の一部はこのようなして観光事業を共同経営しはじめた。だが、普段の農事をおろそかにするわけにはいかないこともあって、住民の多くはこの共同経営組織に参加せず、参加した者にとっては大きな負担と意識されていた。

2003年3月には、共同経営に既に参加していた頭目イチェ・スロン (Icyeh Sulung) が発起人となって、スマグスの住民を原則的にすべて会員として加入させる共同経営組織を結成することを決めた。この時に入会金をなくし、会員全員に観光収益を分配することとした。2004年1月1日に共同経営組織は部落の土地・財産共有制度の全面的な実施を決めるとともに、共同経営を遂行するため、「トゥヌナン (Tnunan)」という組織を結成した。このようにして住民は原則的にすべてこの組織に参加することになった。

だが、これはあくまでも原則であり、例外もある。2004年の時点では、実際に部落で生活する117人のうち、105人が会員であった。2007年12月の時点では実際に部落で生活する104人のうち、会員は84人である。参加していない人々の中には子どもや学童などが含まれており、戸数からみると、2008年8月の時点では2戸が共同経営に加入していない<sup>17</sup>。この2戸は、いずれも自ら民宿を営んでいる。そのうちのひとつである「マナ木屋」の経営者は部落に定住しておらず、重要な休日や桃の採集期などに限り宿を提供している。もうひとつの民宿「紅桃」の経営者は、自分の性格や生活習慣が共同経営にふさわしくないという理由で、共同経営に参加することを拒否している。

この2戸は共同経営に参加していないが、他の住民から排斥されているわけではない。彼らと

図2：スマグス路線図（筆者作成）



は親戚関係にあり、普段の生活では交際を続けている。また、教会の礼拝やクリスマスなどのイベントには一緒に参加している。さらに、部落公約に基づき、部落の公有道路の修繕工作などにも参加を求められ、作業に加わっている。部落全体を共同経営体へと組織化するという思い切った改革が行われる一方、そこに参加しないという選択も許容されていることは注目すべき事実といえる。

## 2. 共同経営の機構

共同経営を遂行する組織の中心には部落会議が設けられている。部落会議は、部落の住民全員が集まる会議であり、必要に応じて開催される。また、恒常的な組織としては、「3会11部」のシステムが作られている。すなわち、個別の事業については「民宿飲食」「教育文化」などそれぞれの部会での合議が行われる一方、全体にかかわる事案については「3会」、すなわち、「トゥヌナン・スマグス (Tnunan-Smangus)」、スマグス長老教会、スマグス部落発展協会で議論している。さらに、1人の総幹事を設け、スマグスの様々な事業を束ねる役割をしている。2004年に「トゥヌナン」が成立して以来、頭目の長男であるバドゥ・イチエ (Batu Icheh) が総幹事に就任している。

## (1) 「トゥヌナン・スマグス」

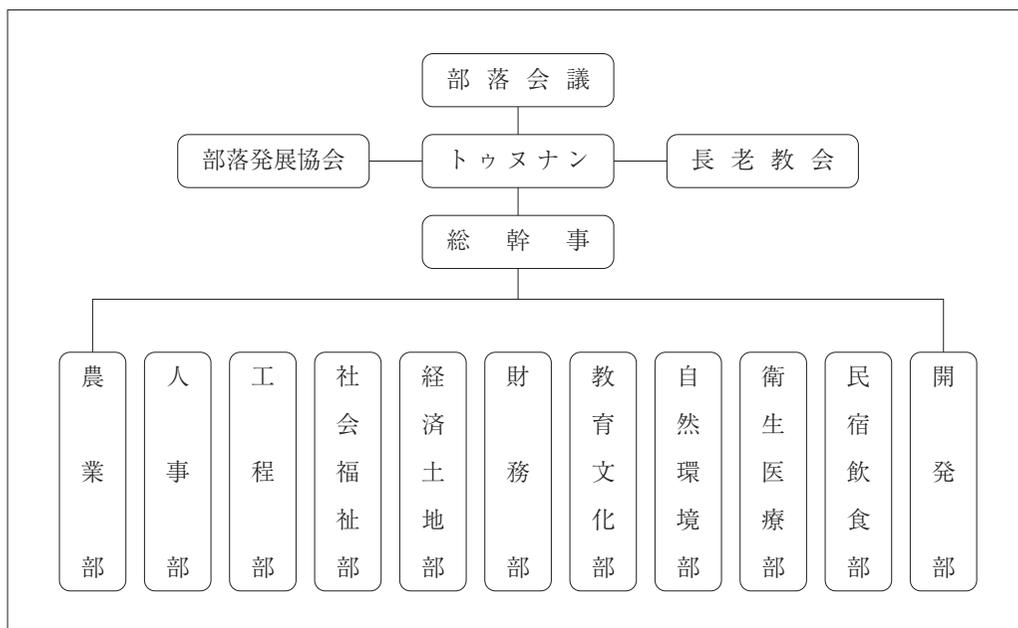
「トゥヌナン」を成立させるために2004年1月1日、部落はタイヤルの伝統的な慣習に従って、「スマミゲ (smike')」という儀式を行った。「スマミゲ」という儀式は部落の共通意思を得る重要な儀式である。そこで頭目のイチェ・スロンは「今日からわれわれは集団経営の方式で部落の仕事を遂行することを決めた。われわれの間に欺瞞はなく、勝手に振る舞うことはできない。『ウトフ (Utux) (タイヤル族の中心的信仰である「霊」のことを指す－引用者注)』がわれわれに恩恵をもたらすように願う。今これらの飲食物により、われわれの共通意思を承認することとなる」と誓った<sup>18</sup>。そして、1月19日の共同経営会議で、共同経営体の組織名をタイヤル語で「共享共有（共同で所有し、共に分かちあう）」という意味をしめす「トゥヌナン・スマグス」に改称し、住民のほとんどが「トゥヌナン」に参加し、部落の仕事を分担するようになった。「トゥヌナン」の長は総幹事と呼ばれることになった。

仕事内容は、朝8時に集合し、男性は農耕や建物の修繕、建設などを担当し、女性は農耕や飲食の準備、民宿の整理などを担当する。民宿や飲食、土産品などの観光収入から、従事者1人あたり月給1万円の給料を支給する一方、医療や教育、冠婚葬祭、老弱、建築などの五項目の費用は部落の収益から補助される。

## (2) スマグス長老教会

スマグスにおける共産的な「トゥヌナン」をうまく進めることができたひとつの大きな要因は、単にそれが伝統的な観念に由来するだけではなく、部落を結束させるものとして教会が存在したことがある。原住民の部落には一般的に複数の教派（長老派、真耶蘇教会、カトリックな

図3：スマグス組織図（筆者作成）



ど)が存在することが多いが、スマグスには長老派の教会しかなく、牧師はすべてタイヤル族出身である。1948年にキリスト教が部落に伝わって以来、すべての住民が信者になった。彼らはタイヤルの伝統的な「ガガ」とキリスト教の教義は類似していると信じている。住民が同じ信仰を持つことは、「トゥヌナン」にとって、より結束力を強める機能を果たしている。教会の牧師の中でも、特に元台湾キリスト長老教会総会議長ヤブ・シヤト (Yabu Syat) 牧師 (2003年~2007年在任) は「トゥヌナン」の形成と維持において重要な役割を果たしてきた。

### (3) スマグス部落発展協会

「司馬庫斯部落発展協会 (スマグス部落発展協会)」は2001年11月に成立した。タイヤル文化の継承・発展及びスマグス特有の自然環境の保全・管理、部落に関わる教育文化や交通、利水、土地利用、産業育成、社会福祉などに関わる事業促進によって、部落の持続可能な発展を図ることを目的としている。主に政府や民間機構などの外的機関と交渉するための機関として機能している。発展協会の理事長は、2001年12月から2005年11月まではマサイ・スロン (Masay Sulong)、2005年12月から2007年11月まではアミン・ユシュ (Amin Yussyu)、2007年12月からイクワン・ユシュ (Ikwang Yussyu) が就任している。

## 3. スマグスの観光事業

スマグスが観光客を魅きつけているのは巨木群である。部落と巨木区の往復5時間程度の散策コースを歩くことが、観光の目玉である。ただし、この散策コースについて観光客から料金が徴収されることはなく、観光客は無料で自由に利用できる。「トゥヌナン」による経営項目はレストラン、売店、民宿で、2008年4月には新しくコーヒーショップもオープンさせた。観光客センターを通じて、民宿と飲食の利用ができる。また、週末には決まった時間に無料の部落ガイドが置かれているほか、土曜日の夜には教会において、部落の紹介、タイヤルの歌謡、教会の賛美歌 (タイヤル語、中国語) などが披露される。クリスマスなどの祝日にあわせて祭りを行うこともあり、舞踊のほか、タイヤル独特の豚串焼き、粟もちなどの特産品も用意される。

このように観光事業が発展したスマグスでの観光客の2007年の延べ数は、「2007年トゥヌナン・スマグス年度大会」での報告<sup>19</sup>によると、22,726名である。そのうち、休日の観光客数が64%、平日は36%である<sup>20</sup>。休日の観光客数はスマグスの住民の2~3倍の、一日平均で250~300名にのぼる。観光客が土日などの休日に集中するのは、竹東から部落まで車で約3時間かかるため、1泊2日の予定で旅行を計画することが一般的であるという理由による。現在、どのように平日の観光客数を増加させるかが部落の観光事業における課題となっている。最近では「タイヤル文化体験コース」や「登山コース」、「農事体験コース」などを計画し、観光客が自然の景色を味わう、またはタイヤル文化を体験することができるような企画が考えられている。

こうした企画は、スマグスにおいてタイヤル文化が消滅してしまわず、伝承されているからこそ可能になっていると同時に、子供や青年にタイヤルの文化を継承することへの意欲を喚起するものとなっている。そして、スマグスでは単に観光事業を発展させるだけでなく、学校教育と連携することにより、タイヤル族としての主体性・自立性を確立する試みがなされようとしてい

る。以下では、この点を詳細に検討する。

## 第2節 「スマグス・タイヤル部落学校」への試み—スマグス実験分班

### 1. 「スマグス実験分班」の発足

スマグスへの連絡道路の開通以前、部落には小学校もなく、子供たちは都市や隣の部落へ「留学」せざるをえなかった。「留学」により若い世代が流出するばかりでなく、それに伴って子供たちが原住民族の文化や言語から遊離してしまうことが深刻な問題となっていた。そのため、部落に学校を建設することはスマグスの人々にとって長年の夢であった。スマグスから外界への連絡道路が開通してからは、新光国民小学（小学校）へ車で約1時間で行けるようになった。しかし、山道は危険で、新光小学校へ子どもを送迎する車のブレーキがきかず、あと少しで断崖に転落するという事件も生じていた。したがって、保護者たちは安全面などを考慮し、部落への学校設置を強く求めた。1ヶ月にわたる新光小学校への通学を拒否するストライキ（同盟休校）により、ようやく新竹県の対応も変わり、2003年に新光小学校の管理下スマグス部落に「新光小学校スマグス実験分班」（以下、スマグス分班）が設置された。実質的には分校ともいえるべきものだが、法的にはそこまでの独立性を認めておらず、「特別なクラス」という位置づけである。

2003年9月、スマグス分班は教会の隣に建てられた2軒の伝統的で簡易な竹製の建物から始まった。この時の県との協議における取り決めは次のようなものである。「2003学年度<sup>21</sup>は3年生までが、スマグス教会を簡易教室として授業を受ける<sup>22</sup>。教師は新光小学校からひとりりを派遣するほか、もうひとりの教師を選抜する。まだ実験段階で経費が限られているために、環境整備や給食の用意、教師宿舎の手配などは保護者からの協力が望ましい<sup>23</sup>。このようにしてスマグス分班の初年度は3年生までの2クラスで教員2名という形で始められた。2004年8月、台風の被害でスマグスから新光部落までの山道、また新光小学校にあるスマグス児童用の学生寮に土砂崩れが起こる危険が見込まれたため、保護者は改めて県と交渉し、ようやく全学年の小学生が「スマグス分班」で学ぶことを認められた。

2008年5月現在（2007学年度）、学校施設は竹で建てられた教室3棟、事務室1棟、教会の構内にある「遠距教室（遠隔教室）」1棟、コンピューター教室1棟がある。「遠距教室」は、インターネットを通じて新光小学校本校と会議などを行う機能を持つ教室であるが、ビデオなどを観賞する視聴覚教室としても使われている。コンピューター教室は教会の構内ではなく、部落の中心である広場に隣接して設置されている。この教室のコンピューター機材は台湾国内のいくつかの企業、団体が共同で寄付したものであり、部落の共有財産となっている。2008学年度は、児童が8名在籍し、1年生2名、3年生3名、5年生3名となっている。教員3名（常勤教師1名、非常勤教師<sup>24</sup>2名）、兵役で手伝う兵士1名<sup>25</sup>が配置されている。

スマグス分班は県の政策や予算措置により6年目に入った。しかし、スマグスの人々が求めているのは、「特別なクラス」という実験的クラスの設置ではなく、自分たちの民族文化を維持・発展させるための学校である。「スマグス・タイヤル学校」のホームページ<sup>26</sup>では、次のような

「建校（学校建設）計画」（2004年作成）が表明されている。

3年前、部落では竹で簡易な教室が建てられ、「特別なクラス」ができた。子どもが部落で勉強することができ、毎日家に戻って親と一緒にいられるようになった。部落の学校では母語（タイヤル語）の授業もあり、竹編、彫刻、森の紹介などの授業もある。だが、われわれは部落で森の中にある小学校を建てたい。すべての建物はタイヤル族の伝統的な屋敷のようなものである。この学校ではタイヤル族の最も重要な知恵を教える。子どもはタイヤル祖先の生活を理解し、祖先の知恵を学ばなければならない。四季の変化を観察し、その季節にすべきことをする。狩猟文化を知らなければならない。自然を尊重し、森と平和につき合う。タイヤル祖先が顔に入れ墨をした意義を理解し、自分の成長と進歩を求める。山林でタイヤル祖先の歌を歌い、物語を語る。民族の団結を学び、共有の精神を実践し、祖先の訓示を銘記する。そして、国語（中国語）や数学なども勉強し、いい成績をとる。現代の知識を学び、外の世界に向き合う準備をする。

「建校計画」ではこのようにタイヤルの祖先の知恵を学ぶことを求めると同時に、国語や数学、インターネットなど「現代の知識を学び、外の世界に向き合う準備」をすることも求めている。すなわち、学校という現代的な空間を伝統的な知恵と現代的な知恵を結びつけるための空間にしていこうという考えである。さらにいまだスマグスの学校が「特別なクラス」に止まっている現状を憂え、「タイヤルの森にある小学校は、今はまだ夢だが、われわれの努力により、必ずこのタイヤルの森・雲の彼方にある部落で建てられるようになる」と、「タイヤル学校」という将来への思いが述べられている。

以下では、スマグス分班における教育事業が現行の教育体制の下でどのように進められてきたのかを、カリキュラム、教師、教材に即して明らかにする。

## 2. 現行のカリキュラム

スマグス分班は行政システムから見ると新光小学校の一部であり、そのカリキュラムは基本的に中華民国教育部（日本の文部科学省に相当）の設定した「国民中小学九年一貫課程綱要（中小学校一貫教育実施要項）」に従わなければならない。「国民中小学九年一貫課程綱要」は次のような経緯で制定されたものである。国際的に多文化教育の重要性が認識される状況の中、台湾でも特に1990年代以降、母語復興運動が活発化し、1993年には小学校で「郷土教学活動科（郷土教育科目）」<sup>27</sup>を設けることが定められた。ただし、当時の原住民族に対する郷土教育の内実は、民族歌謡、舞踊などの学習にとどまり、母語の伝承には効果が見られなかったと指摘されている<sup>28</sup>。2001年、教育部は多文化主義に基づく「多元化教育」という方針を打ち出し、各民族の文化・言語を尊重する「九年一貫課程」<sup>29</sup>を実施した。これにより、国民小学では必修科目、国民中学では選択科目として、毎週1コマ（小学校40分、中学校45分）から2コマの「郷土言語課程」（閩南語、客家語、各原住民族の言語の中から1つを選択）を実施することを定めた<sup>30</sup>。

原住民族の代表的文学者ワリス・ノカン（Walis Nokan）<sup>31</sup>の指摘によると、この方針は、母語教育の推進により台湾を「本土化」という当時野党であった民進党の主張の結果という性格が強く、原住民族自身によるアイデンティティ表明という意味合いは希薄だった<sup>32</sup>。原住民族教育は、台湾における他民族に比べても、経費、教員などの教育資源がはるかに乏しいこともあって、現在も将来像は依然として曖昧な状況が継続している。こうした状況の中で、スマグス分班では「文化課程（文化学習）」や「母語」という枠の中で、独自の実験的な試みを行っている。

表1は、スマグス分班における第3学年の授業時間数を例として挙げたものである。表1の授業時間割での「母語」は、スマグス分班に特有の試みではなく、全島的な教育政策でもある。しかし、学校により授業を実施する時間数には差があったり、正式な授業時間外に実施されたりすることもある。したがって、スマグス分班で「母語」が週2コマで実施されているのは、こうした一般的な傾向に比べれば、相対的に多くの時間を設けていると言える。ちなみに、2007学年度後期では「母語」の年間授業時数は1、3、5学年とも38コマずつある。

表1：スマグス分班2007学年度3学年授業時間割（筆者作成）

	月	火	水	木	金
1	国語	国語	国語	週会	文化課程
2	数学	数学	社会	国語	文化課程
3	健康と体育	母語	健康と体育	数学	生活
4	英語	母語	コンピュータ	自然	生活
昼 休 み					
5	文化課程	自然			総合
6	文化課程	自然			部活
7	社会	社会			部活

「国民中小学九年一貫課程要点」によると、言語領域の科目は学習時間数の20～30%を占め、「健康と体育」や「社会」、「芸術と人文」、「自然と生活科技」、「数学」、「総合活動」などの領域に関わる6科目の学習時間数はそれぞれ10～15%を占めることと規定している。また、2～5コマの「自由科目」を利用して、各学校の特色ある授業や補足授業などを設定することが学年毎にできるようにしている。スマグスでは、このうち「芸術と人文」や自由科目の時間を利用して、独自の「文化課程」を設定している。表2は2007学年度後期における「文化課程」の一覧である。月曜日の授業は1、3、5年生が一緒に習っている。金曜日の授業では、手工芸がやや難易度が高いので、3、5年生だけが受けている。一学期のコマ数でいうと、竹や藤などを使って生活道具を作る「竹編」は18コマ、木材や竹材を「彫刻」する授業は12コマ、タイヤル族の伝統社会で女性が結婚するために上達しなければならない「織物」は12コマ、タイヤル族の伝統的楽器である「口簧琴」（ハーモニカ）や「木琴」を製作する「楽器」の授業は8コマ、タイヤル族の「歌舞」は6コマ、部落を囲む自然をよく理解するための「植物」を弁別する授業は4コマ、

狩獵文化を伝えるための「動物」を弁別する授業は4コマとなっている。

表2：スマグス分班2007学年度後期文化課程時間割（筆者作成）

3月		4月		5月		6月		7月	
月	金	月	金	月	金	月	金	月	金
18	22	3	7	7	4	5	2	2	6
織物	彫刻	美術	彫刻	織物	竹編	美術	竹編	歌舞	楽器
25	29	10	14	14	11	12	9	9	13
織物	彫刻	織物	彫刻	美術	竹編	動物	竹編	歌舞	楽器
		17	21	21	18	19	16	16	20
		織物	彫刻	植物	竹編	動物	竹編	美術	楽器
		24	28	28	25	26	23	23	27
		美術	彫刻	植物	竹編	美術	竹編	歌舞	楽器
		31					30		
		織物					竹編		

※月曜日は第5、6コマで2コマ、金曜日は第1、2コマで2コマずつ文化課程を実施している。

ラファイ・イチェはこうしたカリキュラムのねらいについて、「従来の教授法は教科書から理論的なものを子どもに習得させる。スマグス分班では実際の製作の経験から子どもにタイヤルの文化を身につけさせたい」と述べる<sup>33</sup>。したがって、「文化課程」では、たとえば工芸品の製作をカリキュラムに入れることにより、子どもにタイヤルの伝統文化を体験する機会を与えている。また、ラファイは「彫刻はタイヤル族の歴史において新しいものだが、彫刻によりタイヤルの文化を記録することができる」とも述べる。すなわち、これらの「文化課程」は、竹編や織物のような従来の伝統文化を継承するだけでなく、彫刻のように新たな創造を可能にする技能を身につけるといふ意義も兼ね備えている。

スマグス分班におけるタイヤル文化の教育は、観光事業の発展とも有機的に結びつけられている。例えば、「舞踊」の授業で習った原住民族の舞踊を、クリスマスなどのイベントにおいて観光客の前で上演することもある。もともと、観光事業として上演されていた「原住民族舞踊」とは、ポップ歌手（原住民族か漢族かを問わない）の歌う「原住民族音楽」を流し、「原住民族らしい動作」で振る舞うだけであった。それではタイヤル文化を習得できたとは言いがたいばかりか、こうした「原住民族舞踊」によって、子どもたちのタイヤル文化、原住民族文化に対する認識に誤解を与える可能性が高い。そうした問題意識から、現在では子どもたちがスマグス分班の「舞踊」「歌謡」「楽器」などの授業で習ったタイヤルの歌や踊りを、毎週土曜日の夜に教会で上演することになった。また、この演奏に続いて生徒代表がスマグス分班の成り立ちや将来の目標を観光客に紹介するというも行なっている。

この他、分班の授業の一環として作製された工芸品を観光事業に生かすことも計画されている。元来、スマグスの観光事業では、部落が生産する工芸品は少なく、商店に並んでいる商品のほとんどは、他のところから仕入れたものである。こうした状況を改善するために、「織物」「彫刻」「竹編」などの授業で子どもたちが作った簡単な工芸品を観光客に販売する提案が検討されている。こうしたことが可能になれば、部落の収益の増加につながるばかりでなく、自分の手で作った工芸品が、将来、経済手段のひとつとなりうることを子どもたちに理解させることができる。

サクリュウは彼の著書『部落を教室にする』において言語や工芸、技能、思想などの文化を伝承することの重要性を説いてきた。それと同時に、この過程で新しい事業体を開発し、部落での就業機会を増やし、住民が住みたくなるよう部落環境を創造することの必要を主張してきた。まさにそのような実践がスマグスで具現化されつつあると言ってよい。

### 3. 教師の採用と資質をめぐる問題

スマグス分班は新光小学校の分校で、基本的には新光小学校に在籍する教師の中からスマグス分班の教師を派遣することになっている。しかし、同じく山奥にある新光小学校の教師はそれほど多くなく、スマグスまではかなりの遠路であるため、教師の派遣は容易ではない。例えば、2005学年度において、教師は漢民族の非常勤教師が2名、兵士が1名しかおらず<sup>34</sup>、教育のための資源は極めて貧弱であった。そのため、スマグス分班は1、2、4、6年生が（児童は全てで15名）いるものの、2クラスで授業を行っていた。

教育資源の貧弱さには台湾における教員の養成と採用をめぐる構造的な問題もかかわっている。台湾では小中学校の常勤教師になるには、学校で「教育学程」（教職科目）を修了後、半年間学校で実習し、教師検定を受け、教員免許を取る。そして、「聯合（統一）教師採用試験」や各学校の採用試験に合格すれば常勤教師になることができる。しかし、教員の補欠は少なく、教員免許を持っていても常勤教師になるのは大変難しくなっている。したがって、多くの教職志望者が非常勤教師として学校で授業することになる。非常勤教師の任用期間は1年となっているため、毎年非常勤教師採用試験を繰り返し受けなければならない。

スマグスの人びとは、部落は新竹県教育局に常勤教師を増員する要望書を提出したが、なかなか回答をもらえなかった。そこで、2006年には、住民自身が原住民族テレビ局などのメディアを通じて教員募集の広告を出した。この「新竹県尖石郷新光國小司馬庫斯実験分班自聘教師徵選簡章（新竹県尖石郷新光小学校スマグス分班教師独自採用募集要項）」（以下、「スマグス分班教師募集要項」）<sup>35</sup>には、この小学校を「タイヤル部落学校」へ発展させようという願いが明瞭に表現されている。

「教師に対する理想像」としては、「タイヤル族文化を認め、その探究を望む」ということのほか、「生命に対する愛・責任・理想」を持ち、「生命の本質に対して広く探究し、生命重視の姿勢を有する」という条件が挙げられている。また、スマグス住民の生活はキリスト教の信仰を中心としているため、「教会における団体生活を受け容れられる、あるいは排斥しない」という条

件が求められている。さらに、「台湾における教育改革の必要性を理解し、台湾教育の多文化化の発展を追求することについて、勇気ある熱意と実践力をもつ」とし、自分たちの部落の教育実践を「台湾教育の多文化化」の流れの中に位置づけている。「応募者の原住民族教育に対する理解」を試すためのテストとして出された下記のような問題は、どのような資質の教師を求めているかを明瞭に示している。

- 1、原住民族教育における個人経験を述べなさい。
- 2、スマグスで教師を務める理由を述べなさい。
- 3、原住民族の学童に最も必要な教育方法の理想像について述べなさい。
- 4、原住民族の学童の発展について現代児童の発展の様子から述べなさい。
- 5、芸術教育と歌舞教育活動の原住民族教育における役割を説明しなさい。
- 6、シュタイナーの「子どもの教育に最も重要なのは『呼吸』である」という説について、教育的意義と教授における応用を論じなさい。

ここに登場するシュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) とは、オーストリアの哲学者・教育者であり、今日世界各地に広がる「シュタイナー学校」の創始者として知られる。子どもたちの内的生命と自発性を尊重するシュタイナーの思想を最も端的に表明したのが、「子どもの教育に最も重要なのは『呼吸』である」という考え方である。こうしたシュタイナーの思想への着目は、「生命に対する愛・責任・理想」を教師の条件として掲げる態度とも通底しており、伝統的な知恵と現代的な知恵を融合しようとする態度を象徴している。

スマグスの独自の行動は教育局を驚かせ、教育局は緊急措置として常勤教師を1名増やした。だが、この教師は平地から転任した漢民族であり、以上に掲げたようなスマグスの人々の要望を理解して赴任したわけではなかった。ただ、残り2名の非常勤教師は漢民族ながらも、ともにスマグス分班を希望して赴任し、一般の授業科目と「文化課程」の実施に協力している。上記の「スマグス分班教師募集要項」を理解し、賛同した人物と言える。しかし、新光小学校の非常勤教師に関する規定やスマグス分班に対する方針は流動的であり、こうした教師が継続的にスマグスにおける教育事業に関与することができるかどうかは不明である。

「母語」の教師を務めているのは、頭目のイチェ・スロンである。「文化課程」の教師を務めるのは、部落の人々である。「竹編」、「彫刻」などは男性の代表、「織物」、「歌舞」などは女性の代表が数人輪番で担当している。これらの先生は「トゥヌナン」の出勤時間に学校で教えているため、給料は「トゥヌナン」の支給する給料のなかに含まれている。これも、スマグスにおける観光事業と教育事業の連携を象徴的に示す事実である。授業する場所は科目により移動する。例えば、「植物」、「動物」などの授業は森に入ることになる。「織物」や「彫刻」は部落の工房や売店の展示場で行われる。このようにして「文化課程」を教えることは、「自然環境は学校で、年輩者は先生だ」というサクリュウの思想を実践するものといえる。

ただし、教師の資質をめぐる問題も様々な形で表れている。新光小学校から派遣される教師は

みな漢民族であり、たとえスマグスに自ら希望して赴任した場合であっても、タイヤル文化とスマグスに特有な地域文化について、それほど詳しくない。例えば、筆者が2006年にスマグス分班でその教育現場の実情を観察した際、3年生の社会科目では各民族の伝統祭儀について紹介していた。先生は、「蘭嶼のタオ族には飛魚祭があり、ブヌン族には打耳祭があり、あなたたちタイヤル族には粟の収穫祭があります。覚えてね!」と、子どもたちに教えていた。しかし、タイヤル族は粟の収穫祭以外にも、時節によってさまざまな祭儀を行っていることをこの教師は知らないようであった。単純にひとつの祭りを子どもに丸暗記させ、それをタイヤル族の文化として一括することは、子どもに誤解を与える恐れがある。

一方、スマグス分班の「文化課程」の教師は、前述のように、部落の人々がそれぞれの専門により担当することになる。その教師たちは教える内容についてはもちろん正確な知識を持っている。ただし、スマグス部落全員が広い意味での親戚関係にあることもあって、授業中の教師に対する子どもの態度は一般の授業の教師への態度と比べると真剣ではなく、勝手に喋ったり、遊んだりすることもある。また、「文化課程」の教師は専門的な教授法などを習得したことがなく、授業進度や達成目標が明瞭に進められていない点も見られる。

このように「スマグス分班教師募集要項」の趣旨に共鳴し、しかも適切な教授を行うことのできる教師を常勤教師として確保するという願いは、まだ実現していない。こうした状況において、教師の資質という問題を克服するために、よい教師を招聘することとあわせて、よい教材の編集が必要な状況となっている。

#### 4. 教材の編集

スマグス分班における一般課程の教材は新光小学校の採用したものに準じているが、「文化課程」については独自の教材を編集しようとしてもいる。ここでは、「母語」授業で使われている教材を分析したい。前述のように、「母語」は週1回2コマで実施されているが、スマグスは外界との連絡が不便なこともあって、母語使用の機会が比較的多く、子どもはほとんど母語が話せる。ただし、「母語」教師である頭目によると、台湾原住民族の言語には文字がなかったため、子どもにローマ字表記で自分たちの言葉の読み書きができるようにすることが課題となっている。

「母語」を教えるため、全島的には、教育部と原住民族委員会<sup>36</sup>が「九年一貫課程」における「郷土言語課程」に基づいて編纂した、「原住民族言語九階教材（九段階教材）」（以下「九階教材」）が用いられている。これは、2002年以降、政治大学原住民族言語教育文化センターに委託して編纂したものである。「九階教材」は原住民族の言語を40に分け<sup>37</sup>、言語ごとに小学校第1学年から中学校第3学年までの計9冊を刊行した。2006年度から第1冊から第3冊が正式に学校で使われることになり、スマグス分班でも基本的にこの3冊の教材が使用されている。原住民族語教材の編纂に数多く携わっている黄美金によると、母語の教材は以下の点に留意して作成されているという。①学生の日常会話、社交対応などを主要内容とする、②学生のコミュニケーションの能力を育成する、③教材を生活に対応したものにし、実用性や知識性、文化性などを重視す

る、④各民族の歌謡や伝説、物語なども編入する<sup>38</sup>。「九階教材」は日常会話を中心とする生活対応型の内容がほとんどであり、民族に関わる伝説や祭儀についての内容は、第九冊の「祖先の知恵」や「祭典と礼節」などの単元に収録されることになっている。実際、現在使われている第1冊から第3冊の題目に見るかぎり、タイヤル族向けの教科書でも、タイヤル族に関わる歌謡や伝説、物語などの内容は見られない。

表3：「九階教材」1～3冊における内容一覧（筆者作成<sup>39</sup>）

	単 元	題 目
第1冊	学校へ行く	1、こんにちは
		2、私は学生です
		3、起立
	私の友達	4、お名前は？
		5、女の子です
		6、私の犬
	教室にて	7、先生はここにいる
		8、これは何ですか
		9、私の母
		10、赤い本
第2冊	家	1、私の家
		2、おはよう
		3、10歳になった
第2冊	私の部落	4、家はどこですか
		5、どこから来ましたか
		6、川と山
	自然	7、太陽が出た
		8、雨が降った
		9、白い雲
第3冊	学校生活	1、私の友達
		2、先生の話
		3、休憩時間
	戸外活動	4、病気になった
		5、スポーツ
		6、歌と踊り
	日常生活	7、今は何時ですか
		8、電話をかける
		9、お爺さんに訪ねる
		10、図を描く

タイヤル族向けの教科書でも、タイヤル族に関わる歌謡や伝説、物語などの内容は見られないことは、本文も同様である。例えば第1冊第1課の全文は以下のように書かれている。

**sinsiy-pcbaq-biru, lokah su ga?**

先生、元気ですか。

**lokah saku, lokah su uzi?**

元気です。あなたは？

**lokah saku uzi, mhway su balay!**

私も元気です。ありがとう。

次にレベルだが、「九階教材」第1～3冊の日常会話を主としたこのような内容は、あまり母語に接する機会のない児童が一から勉強するには適切な教材と言えるかもしれない。しかし、スマグス分班の「母語」教師であるイチェ・スロンは、「あれ（「九階教材」、筆者注）はうちの子どもたちにとって簡単すぎる」<sup>40</sup>と述べている。

また、第2冊「私の部落」単元における第5課の内容を見ると、スマグスの学童にとっては、地理的環境の例が日常生活からずれていることがわかる。

**Batu, minkahul su inu?**

バドゥ、どこから来ました？

**minkahul saku sqoyaw.**

環山から来ました。

**musa su inu suxan?**

明日どこへ行きますか。

**musa saku qyawan suxan.**

明日七家灣へ行きます。

**sgaya ta la, thohway musa.**

ごゆっくり行ってらっしゃい。さようなら。

「環山」は台中県和平郷にあるタイヤル族の部落で、「七家灣」も和平郷における観光地である。ここに挙げられているのは、スマグスの学童にとっては遠く離れた地域の出来事であり、よそよそしさを感じさせることは否めない。そのため、スマグス分班では「九階教材」を使いながら、同時に母語教材を自ら編纂して用いている。スマグス部落は前述の原培会、および教材のデジタル化に詳しい劉宇陽<sup>41</sup>と協力して、最終的に言語教材12冊、文化教材6冊、民族植物6冊、民族動物6冊などの教材を編纂、出版する予定にしている。ちなみに言語教材の第1冊の『森』は2007年に新竹県尖石郷公所から、第2冊の『火』は2008年にスマグス部落発展協会からすでに出版され、使用されている。また、文化教材の第1冊の『スマグス・タイヤル学校』も2008年末にスマグス部落発展協会により出版された<sup>42</sup>。

スマグスの編纂した教材は、スマグスの生活に即して主にタイヤル族の伝統生活における技術

や礼儀について紹介し、それを勉強することができるように工夫されている。第1冊の『森』では、スマグスの伝統的生活では重要な知識である狩猟の季節、そして狩猟する際の禁忌について記述している。第2冊では、「火」を通して、石炭や灰の使い方について述べている。第3冊では、まずスマグス部落の由来を紹介し、また前述の「建校計画」も収録した。それはたとえば、次のような記述からも明らかである。

『Hlahuy 森』

zik' bagan. 夏がやってくる。

musa mlata ska hlahuy. 森へ狩猟に行ける。

musa rgyax inip' syang. 森で騒いではいけない。

cingay pinbagan. たくさんの獲物を捕るのだ。

mhway qu utux bnkis lga, mqas ta maniq qnasuw. 祖霊に感謝してからご馳走になる。

『Puniq 火』

qmisan lga, smli qhoniq, ruma. mnahu ru malah, ini khyaq la.

冬がやってきた。木材を貯め、たき火にあたりながら、寒くはならない。

qutux qutux ngasal maki plahan. malah lga pcbag qu bnkis, in yungi qu laqi.

家ごとにたき火部屋があり、年輩から建て方を教えてもらい、また次の世代に伝える。

tbagah puniq, mqas laqi. psuling syam yaba, ptatah ngahi yaya.

台所では火を焚いた。父はお肉、母は芋を用意しており、子どもが喜んでいる。

heloq na puniq qmwax roziq. sqalux hnkyu Mit, Para, Bqanux, Ngarux ini stmaq.

煙で目が痛くなったが、燻した羊やキョン（山羌）、鹿、熊などの肉は臭くならない。

bagah puniq qani ga, tbagah zik sakaw shlhul m' abi.

燃やした石炭は寝台の下に入れ、暖をとる。

huli puniq qani ga, stahuk wayay nuka splquy nya.

灰は染料として麻を染めたりすることができる。

kwara llaqi, qhniq Kyana qani ga, yan puniq mtalah ru mhebung, laxiy ta zingi ke bnkis Tayal.

火鳥が冬の火を消させない。タイヤルの先祖の言葉を忘れてはいけない。

【Pqwasan Tayal Qalang Smangus スマグス・タイヤル学校】

Aring Pinsbkan tehok squ llingay na Papak-Waqa,

nyux ki' an qalang na Tayal, ru nyux si ggluw Gaga qnxan bbnkis.

新竹の山には、多くのタイヤル族の部落がある。

タイヤル族の人びとが先祖の訓示により部落で生活する。

zik na Papak-Waqa, nyux ki' an Mrqwang, Mknazi ru Mklapay.

maki qutux qalang, tkm' an balay na yulung.

尖石の奥山では、雲の彼方にひとつの部落がある。

部落は一年中雲に囲まれる。

qmisan mwah qu hzyaq lga, mhlaqiy la.

aring hlhul lga tmanguw abaw ru mkhpah.

冬は白雪が降り、春は山桜が咲く。

innagal lalu Makus qu qalang Smangus qani,

sinnoya myan ga, aki m' qalang na Utux Kayal.

この部落はスマグスという、神様の部落、タイヤルの故郷である。

スマグスの地名は、マグスというある祖先を記念するためにつけたのである。

記述内容だけでなく、スマグス教材の文章の構造や配列は、上記の例と比べてみるとわかるように「九階教材」より長くて複雑であり、「読む」ことの訓練に対してより有効だと考えられている。この点もスマグスの現状に合わせた教科書編さんとなっている。なお、スマグスの作った教材では子どもにローマ字表記で読解の練習をさせている。

このように独自に開発した教材は、学校において伝統文化を継承していく上で大きな役割を果たすと思われる。ただし、まだ言語教材12冊のうちの2冊、文化教材の1冊が刊行されたに止まっており、言語教材10冊、文化教材5冊、民族植物6冊、民族動物6冊を含めて、「母語」や「文化課程」の授業全体をカバーできる教材を編纂・刊行できるかは今後の課題である。

## 結論 — 原住民族にとっての多文化教育のモデル—

スマグス部落は「後山」、つまり僻地にあるために観光事業が発展しにくい地区であったが、タイヤル族の「共有共有」の伝統文化・精神を再建することによって観光事業を活発に発展させることに成功した。また「部落を教室にする」というサクリュウの思想に基づいて学校教育を再構成することにより、観光事業と教育事業を有機的に結びつけている。観光事業と教育事業の連携は、たとえば、子供たちがスマグス分班で部落の年長者たる「教師」から学習した歌や踊りを観光客の前で上演する、あるいはこれらの「教師」たちの報酬が観光事業をめぐる共同経営体から支払われるといった形で具現化されている。こうした連携により、部落として収入を確保できるばかりでなく、子どもたちがタイヤル族としてのアイデンティティを強化し、さらにそれを学

ぼうとする意欲を高めるものとなっている。加えて、このことは、スマグスの人々に自分の文化について主張する権利も一層認識させるようになっていく。独自の方針で教師を採用しようとしたり、専用の教材を作ったりしたことに、そのことは表れている。

教育の方法、内容については、一般的な国民教育を実施しながら、同時に伝統的な知恵と現代的な知恵を結合しようと試みている。これは、彫刻のように必ずしも伝統的とはいえない技能を伝統的な竹編や織物にあわせて活用している点にも見える。教師の採用においては、「タイヤル族文化を認め、その探究を望む」という条件に加え、今日世界的にも着目されているシュタイナーの教育思想に基づく「生命の本質に対して広く探究し、生命重視の姿勢を有する」という理念を条件として提示している。

このような観光事業と教育事業の連携、独自の採用条件や自身による教員の募集、シュタイナー思想の重視などはスマグスの人びと自身が自分たちの教育を台湾教育の多文化化という流れの中に位置づけるものである。そして、それは原住民族自身による自主的で主体的な多文化教育のひとつのモデルである。スマグスにおけるこれらの試みは十分着目に値する。

ただし、スマグスの試みにおいてはなお多くの検討しなければならない課題も残されている。教師の立場の不安定さやその資質、「文化課程」を含む教材の編集をめぐる問題については既述したが、そもそもスマグス分班の存在自体が不安定であり、上級学校との接続という問題が存在している。スマグス分班は保護者の要望により、臨時的・実験的に設置されたものであり、新竹県教育局は毎年分班の教育成果などにより、継続して設置するかどうかの審査を行っている。スマグス分班は「文化課程」に力を注ぐが、政府は国民教育の部分だけをスマグス分班の教育の成果として審査し、「文化課程」の実践を審査の範囲から外しており、評価らしい評価をしていない。また、「文化課程」は中学校に入ってから受けることができない状況で、どうやって中学生にタイヤル文化に関する課程を継続的に習得させることができるのかという問題も残されている。

これらの状況は次のような発言の背景となっている。保護者のユラウ・ユカン (Yuraw Yukan) は、「2007年の審査委員が、『文化課程』は中学校に入ってからもう関係ないので、そんなに重視する必要はないと言ったが、それは私たちの理念と反している」と述べた。また、保護者でもある部落発展協会の理事長イクワン・ユシュも、「単純に一般科目の学習を目的に子どもを学校へ行かせるなら、直接竹東(平地)へ送ったほうが効果的じゃないか。でも、それは私たちの望みではない」と言った<sup>43</sup>。保護者たちの思いの中では「母語」・「文化課程」こそが重要なのだが、行政的には評価されない。こうした状況において、タイヤル文化を学校で伝えていくという信念が基本ではあるものの、子どもに国民教育とタイヤル教育とのバランスのとれた質のよい教育を受けさせることがスマグスの住民にとって重要な課題となっている。

今後、こうした問題点の検証を含めて、他の原住民族居住地域における実践との比較検討が望まれる。原住民族における母語教育にかかわる一般的な実践とスマグスにおける実践の質的な差異は、「九階教材」とスマグスで独自に編集した教材との差異にも象徴的に表れているとも言えるが、他の地域でも同様の試みが行われていないかは管見する限り未検討のままである。特に、

スマグスとは異なった形であれ、観光事業と教育事業を連携させている阿里山山美部落や、サクリュウの地元であるダヴァラン部落での試み——その試みは必ずしも成功していないことが広く知られている——との詳細な比較検討は必要である。今後の課題としたい。

## 注

- 1 原住民族基本法第2条によると、「部落」とは「原住民が原住民族地区における一定の区域内において、伝統規範により共同生活で結び合う団体である」と規定している。日本の自然村にあたる基本的な生活単位である。また、日本では「被差別部落」問題にかかわってくる場合が多いが、本文では台湾で慣用されている語彙を使う。
- 2 学校の呼称について、時期により「スマグスタイヤル学校」や「スマグス森小学校」などの名称が用いられているため、タイトルでは2008年現在の呼称を示し、本文では当時の呼称を引用する。
- 3 謝世忠『族群人類学的宏観探索：台湾原住民論集』台北、台湾大学、1994年。
- 4 原文は『跨世紀文化扎根運動——部落有教室』（台北、順益博物館、1998年）である。直訳すれば「部落に教室ある」だが、その場合、部落全体を伝統的な文化の学びの場にしようとする著者の意図に反して、部落の一角に教室があるという風に解釈される恐れがあるので、ここでは「部落を教室にする」と意識することとする。
- 5 サクリューが例にあげたのはパイワン族のダヴァラン（Davalan、達瓦蘭）部落である。パイワン族の宗教観では先祖を崇拜し、伝説によりパイワン族は百歩蛇の子孫で、百歩蛇を非常に畏敬する。また、様々な祭礼行事は祭司や巫女により行われる。
- 6 蔡秀菊『司馬庫斯部落共同経営模式之探討』台中、靜宜大学生態学研究科修士論文、2005年。蔡は小学校の教師でありながら、現代詩人でもある。一時、スマグス部落で部落民と一緒に生活し、『司馬庫斯部落詩抄』（高雄、財団法人鍾理和文教基金会、2003年）を著している。
- 7 ラファイ・イチェ『是誰在講什麼樣的知識？Smangus 部落主体性建構與地方知識実践』台中、靜宜大学生態学研究科修士論文、2008年。
- 8 ヤユツ・ナパイ「台湾原住民村落における部落発展再考－観光事業と伝統文化教育の連関に着目して」（『天理台湾学報』17号、2008年、pp.107-120）。
- 9 スマグスに今も流布する伝説によると、200年前に5人兄弟の家族がスマグスや近くの部落で新しく耕地を開墾するために活躍していた。現在、スマグスに定住しているのは、この5人兄弟の一番下のミグイー・ネチエ（Miquy Necyeh）の子孫たちであるといわれている（ラファイ、前掲書、pp.49-50）。
- 10 日本植民地時代には、当時の新竹州大溪郡で、マリコワン部族と同じくタイヤル族のキナジー（Mkinazi、今日の泰崗部落）部族の間に争いが頻発したため、1926年にスマグスを含む両部族の部落が竹東郡内湾溪上流域へと強制的に移住させられた（台湾総督府警務局編『理蕃誌稿』4巻、1930年、pp.1029-1030）。しかし、戦後になって次々と元の尖石郷の部落に戻っていった。
- 11 ラファイ、前掲書、p.53のデータに基づく。
- 12 ラファイ、前掲書、p.54。
- 13 スマグスホームページ（<http://www.smangus.org/tuqi.html>）におけるデータによる（2008年12月28日確認）。
- 14 蔡秀菊、前掲書、pp.129、132。
- 15 インフォーマント記号はS821である。蔡秀菊のインフォーマントでは、アルファベットは氏族のコードで、数字は世代と出生順を表す。S821においては、1桁目の8は、1世代目第8子を表す。2桁目の2は、2世代目第2子を表す。3桁目の1はインタビューイであり、3世代目第1子を表す。
- 16 タイヤル族の伝統では、農耕、狩猟、冠婚、葬祭などすべての生活行為は「gaga」に従わなければならない（Pusin Tali、『泰雅爾族的信仰與文化－神学的観点』台北、国会展望文教基金会、2007年、pp.75-76）。
- 17 2008年5月28日、筆者がスマグス部落発展協会秘書王東芳に取材した記録による。
- 18 ラファイ、前掲書、p.64。
- 19 『2007年Tnunan-Smangus 年度大会報告』。原資料が散逸したために、ラファイ、前掲書 pp.61-63よりの重引。
- 20 これは、スマグスの宿泊施設を利用した観光客数のみを集計したデータであり、実際の訪問者数とはもつ

と多いものと考えられる。

- 21 台湾では、新しい学年は9月始まりで、8月終わりとなる。
- 22 実際には、学童の年齢により第1学年と第3学年だけを設けていた。
- 23 「尖石司馬庫斯分校實驗分班」『中央日報』2003年9月12日付。
- 24 中国語では「代課老師」である。
- 25 台湾では18歳から36歳の男性は兵役に服する義務がある。2007年3月21日の修正法によると、兵役期間は1年10ヶ月である。教員になる兵士は「替代役」と言い、兵隊として軍事訓練を受けるかわりに、学校や役所などの様々な公共機関で働くことになる。スマグスに来た兵士はだいたい1年間滞在し、自分の得意な科目を教える。例えば、2006学年度の兵士はコンピューターの授業、2008学年度の兵士は英語の授業を担当している。
- 26 <http://sccd.usc.edu.tw/yuyang/smangus/index.swf> (2008年6月29日確認)。
- 27 教科内容を「郷土言語」、「郷土歴史」、「郷土地理」、「郷土自然」、「郷土芸術」と5科目に類別した。
- 28 黄志偉『文化伝承の種子：原住民学童学習母語歷程之研究』台東、台東師範学院教育研究科修士論文、2001年、p.11。
- 29 6年制の小学校と3年制の中学校を、一貫した教育課程として教授内容を設定する政策のことを指す。
- 30 2001学年度は小学校の第1学年だけが実施され、2002学年度は第1、2、4学年と中学校の第1学年に実施された。2003学年度は小学校の第6学年と中学校の第3学年を除く学年で実施され、2004学年度から小中学校の全学年で実施されるようになった(呉武典「台湾教育改革の経験與分析：以九年一貫課程和多元入学方案為例」『当代教育研究季刊』13巻：1号、台北、国立台湾師範大学教育研究中心、2005年、p.45)。
- 31 台湾原住民作家、タイヤル族(1961年～)。1990年から台湾原住民族文化運動にかかわる刊本などを発行。創作分野は詩、散文、評論、人文歴史などである。時報文学賞、聯合文学小説新人賞、聯合報文学賞などを受賞したことがある。
- 32 張慧瑞「原住民母語教育或雙語教育？」(『原住民教育季刊』4号、台東、台東師範学院、1996年11月、p.36)。
- 33 2008年8月15日、筆者取材記録による。
- 34 「別讓孩子再流浪 スマグス吶喊 校留部落」『中国時報』2006年2月12日付。
- 35 国家科学委員会科学ボランティアホームページ (<http://volunteer.nchc.org.tw/Epaper/message/115/>)、2008年9月28日確認。
- 36 憲法により「行政院」は中華民国における最高行政機関と定義され、教育部と原住民族委員会(原民会)はその下に属する機関として設置されている。
- 37 現在、台湾原住民族には14族があるが、居住地域により、同じ民族でも多少の違いが生じるため、「九階教材」では40語別に細かく分けられている。
- 38 黄美金『台湾原住民母語教材和教法之探究』台北、教育部、1995年。
- 39 高清菊「九年一貫課程賽夏語九階教材分析」(『原住民族語言發展論叢－理論與實務』台北、原住民族委員会、2007年)の表を参照しながら、一部修正のうえ作成した。
- 40 2008年5月27-31日、筆者によるイチェ・スロンへのインタビュー。
- 41 実践大学メディア伝達設計学部教授であり、タイヤル語のデジタル化教材を発展するため、2006年1月に初めてスマグス部落を訪ねた。以降、原民会教材のデジタル化や、スマグス分班の成果審査などにも関与している。
- 42 劉宇陽、陳韋齡編『泰雅語初階絵本系列一 HLAHUY 森林』新竹、新竹縣尖石郷公所、2007年。Yuraw Icyang、Lahuy Icyeh、陳韋齡編『泰雅語初階絵本系列二 PUNIQ 火』新竹、スマグス部落發展協会、2008年。Yuraw Icyang、Lahuy Icyeh、陳韋齡編『司馬庫斯泰雅学校 Pqwasan Tayal Qalang Smangus』新竹、スマグス部落發展協会、2008年。
- 43 2008年5月29日、筆者によるユラウ・ユカン、およびイクワン・ユシユへのインタビュー。